第5節　塩の道（信州街道・秋葉道）について

山口三夫

東南相良より、掛川を経、北　森町より秋葉山嶺を打越え、信州飯田に達するを古来信州街道と称し……（『小笠郡誌』大正4年版）、「塩の道」「秋葉道」と呼ばれるこの街道は、南遠の海産物及び塩を北部の山間の町、村そして信州まで運ぶ輸送路として重要な役目をもっていた。同時に北部の産物を運び、相良港から関東、関西への海路をつなぐものでもあった[1]。

以下、塩の道を相良より順にたどってみたい。記述にあたっては退職婦人教師の会小笠支部の「わたし達の記」を参考にした。

この道の起点となる相良町落居には現在もなお塩田跡が残されている。また、元塩問屋河村家も残っている。　**相良町落居**　**河村家**

海産物問屋は同町「須々木」「波津」にあり「大原」の秋葉道基点となる秋葉常夜灯にも近い。　**大原**

ここから「園坂」の常夜灯を通り「京松原」に登る。薬師堂を右にみて牧の原を進むと「朝比奈原」「高橋原」の接する所に千手観音の堂がまつられている。　**園坂**

「高橋原」の三夜灯を過ぎると「塩買坂」を下りはじめる。右に今川義忠の墓所のある正林寺を眺め、「松の茶屋」跡から庚申松の立つ丘に上る。丘を下るとまもなく川上の「市場」にはいる。このあたりはわずかながら旧街道がその面影を残している。　**高橋原**　**市場**

川上の「市場」は物資の集散地であり、この街道の荷物や丹野川の舟便による物資が集められたという。旅篭、米屋、呉服屋、茶屋もあり栄えていたといわれる。

ここから「下平川」「堤」まではっきりとはしないが、「猿渡」を経て好運寺付近を通り、「堤」に出たものと思われる。「堤」には現在の菊川浜岡線と牛淵川の間の戸塚家前にわずかに旧街道が残る。堤橋を渡り、牛淵川右岸を城下橋方面に向かい、ここで再び左岸に渡り、法華寺－春日神社を経て高田橋あたりに出たか、あるいは西北に太郎坊に向かったかは、土地改良、河川改修、道路整備等の工事により旧道が消失していてはっきりしない。　**堤**

高田橋付近から現在の「ひかり団地」内を抜け、古川神社にいたる。古川神社の西を通り耳川の間は街道が残されていたが、今回の土地整備により一部は完全に破壊された。　**古川神社**

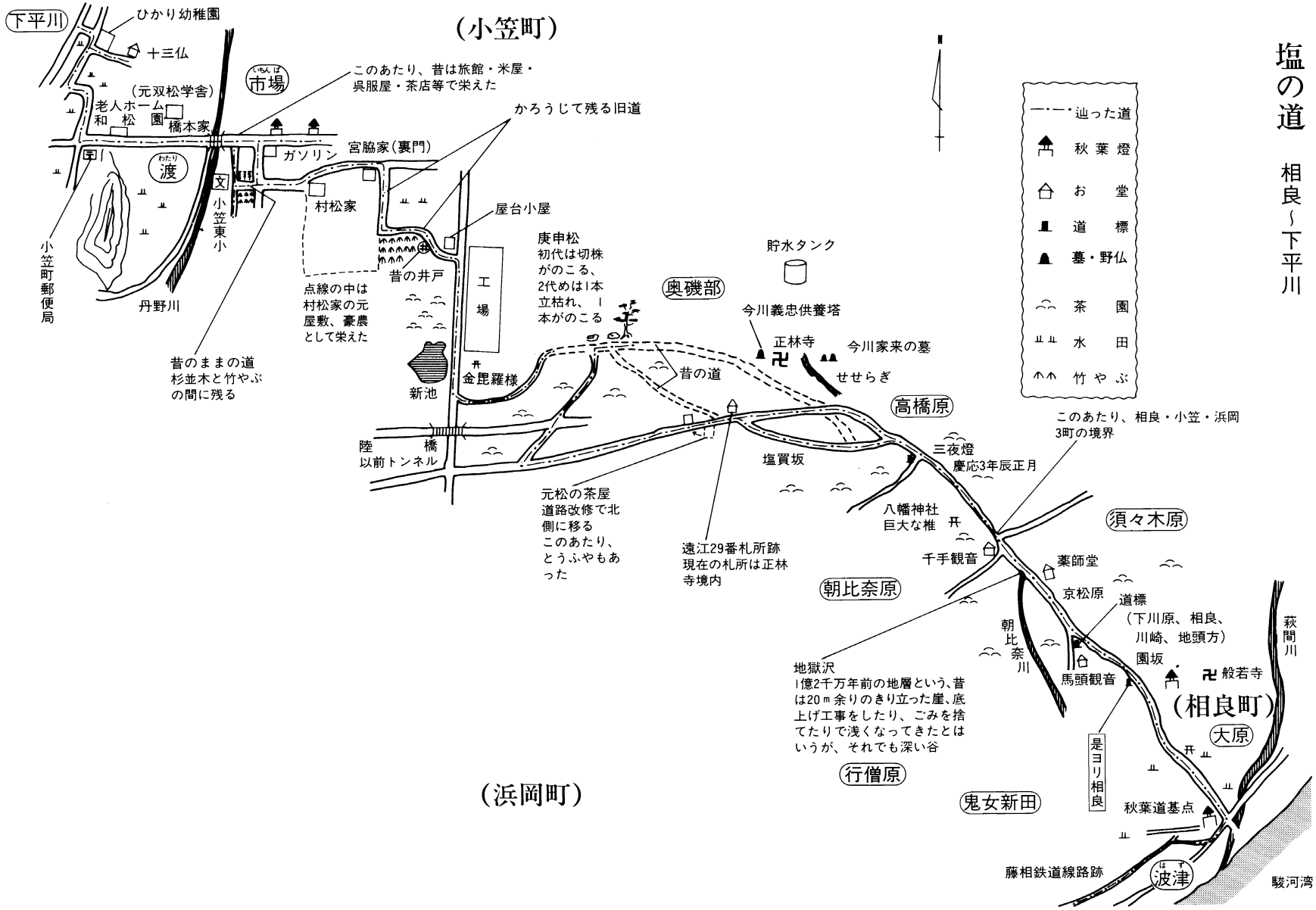
古川神社入り口には「お菊茶屋」があり、荷継所ともなっていた。荷が着くと茶屋の婆さんが人足を呼び集め、つぎの荷継所まで送ったといわれる。また人足の手遊びのバクチ禁止の達しが出たこともあるといわれる。　**お菊茶屋**

高田大屋敷遺跡の南西隅にあたるこの「お菊茶屋」から東へ向かい、上小笠川を渡り、菊川右岸に通じ、旭橋で菊川を渡ると、式内社「奈良野神社」（現在はない）の門前に至る。さらに鎌倉時代の横地氏の居城方面に向かう街道が明治19年の公図写に残されている。　**奈良野神社**

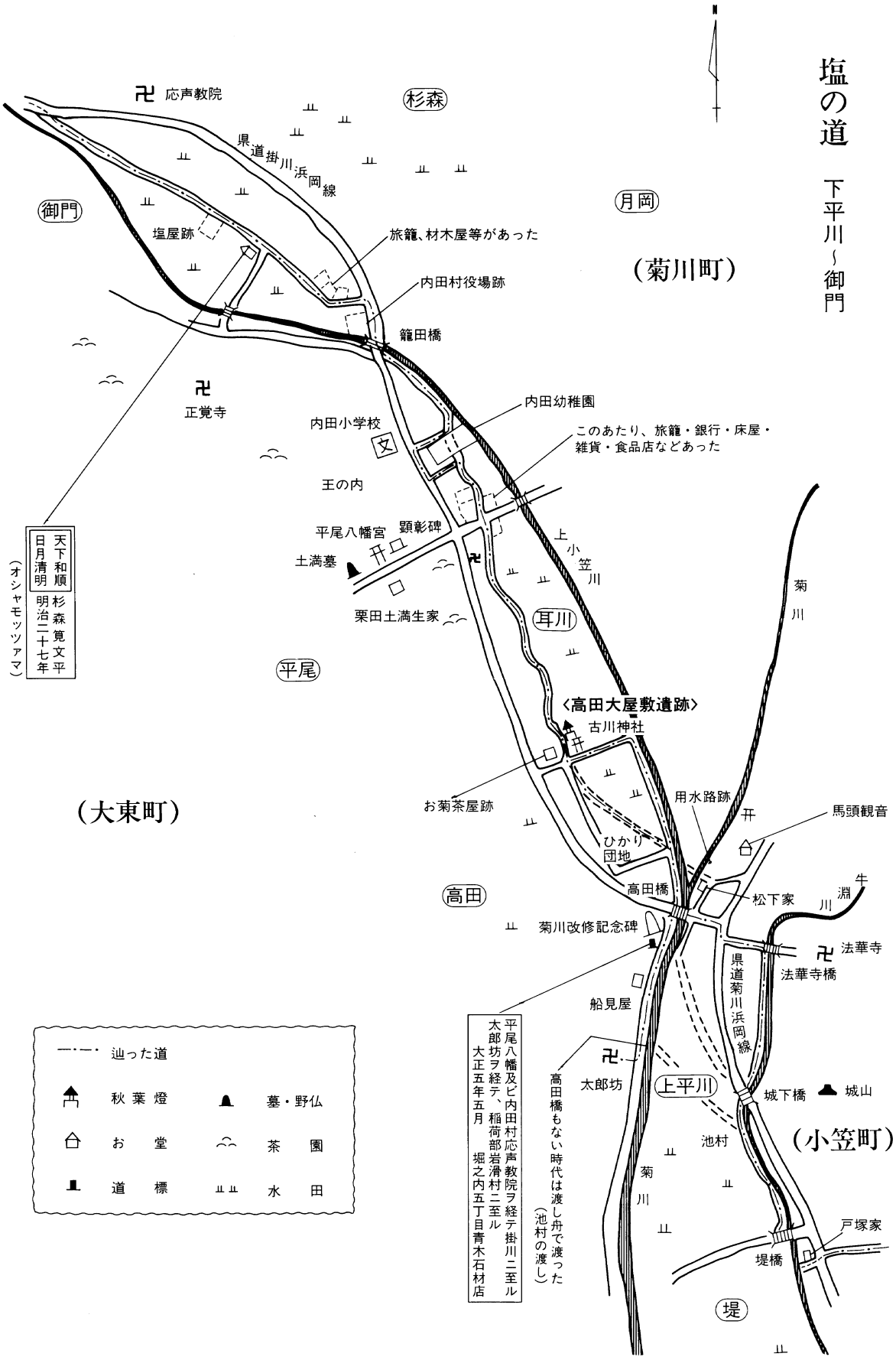
「お菊茶屋」からは「耳川」を経て、「政所」籠田橋を渡り、上小笠川左岸を「御門」に向かう。この付近の最近の発掘調査で水田中から古道の跡が発見されたというが、この街道との関係ははっきりとしない。この付近には塩屋跡「オシャモッ様」の小堂もある。　**政所**

「御門」の現公民館前が荷継所跡であり、塩屋敷跡もある。秋葉常夜灯もある。

上小笠川の左岸を「田島」まで上り、ここで右岸に渡る。上内田橋で再び左岸に渡り、「段」にある庚申塔、常夜灯を経て、ここで「横往還」（横須賀から日坂へ通じる道）と交差する。　**田島**　**横往還**



第52図　塩の道（相良～下平川）



第53図　塩の道（下平川～御門）

「板沢」に入り、常夜灯から「陣場峠」に向かう。この間、上内田小学校北側にも塩屋跡がある。

掛川市内「上張」から「鯛ヶ橋」跡を通り、「新道」「肴町」「紺屋町」「十王」「下俣」「二瀬川」を通り、東海道の大池橋たもとの秋葉神社遥拝所に至る。この間、市内には数多くの常夜灯がある。大池橋、大鳥居は広重の東海道五十三次にも描かれており、ここで東海道と交わっている。再び東海道と別れ、「源ヶ池」へと向かう。「中坂」を上り、「新田」「小津根」「梅老田」（常夜灯）「家代」（常夜灯）「三十川」を経て、「兎沢」では現在のゴルフ場を横切り、「本郷東」へと出る。長福寺前から本郷橋を渡り、「寺島」へ、「花島」付近では現在の天浜線と交差しつつ、森町の「とわた」駅に至る。森川橋を渡り、森町町内を天宮神社前へ、ここの北島屋こうじ店は昔の塩問屋である。城下から葛布川、三倉川の合流点を通り「黒石」へと通じる三倉川をさかのぼる。三倉の栄泉寺付近から「一ノ瀬」を通る道、「半明」を通る道の二つに分かれ、再び「中野」で合流する。「大久保」「静修」を経て「堀之内」「犬居」へ向かい、秋葉下社に着く。秋葉参道を上り、三尺坊を経て秋葉神社に着く。

大池橋

森町

遠州からの秋葉道としては、ここで終点となるが、信州街道、塩の道としては更に林道戸倉線を下り（10ｋｍ）秋葉ダム左岸に出る。「下平山」「上平山」と天竜川左岸を上り、水窪川、天竜川の合流点「舟渡」に出る。ここから水窪川右岸「瀬戸」の荷継場跡を通り、「立原」で飯田線トンネルを通って水窪に向かう。

水窪

江戸時代の道標、常夜灯は各地に見られる。常夜灯に火を灯すことは部落民交代の当番制で、戦前まで各地でおこなわれていた。

以上、塩の道のルートについて述べてみた。今日、高田大屋敷遺跡とこの道との関連が指摘されているが、今後、両者の関わりについての研究が進展することに期待したい。塩の道は、少なくとも近世以降主要な道であったが、近年の変貌には著しいものがある。

30余年にわたる、教員生活の中で、多くの人のお世話になった。今回もまた、退職婦人教師の会の皆さんには貴重な資料を利用させていただいた。最後となったが改めてお礼を申し述べたい。

註

(1) 建設省中部地方建設局浜松工事事務所が編集した『菊川　その周辺』（昭和58年３月）では、塩の道について次のような解説がなされている。

遠州相良港から菊川流域の塩買坂を通り、堤で牛淵川を、高田で菊川を渡り、掛川、森、秋葉、山へ登り、青崩れの天嶮を越え、はるか信州へ通ずる道で、静岡県側では信州街道、長野県側では秋葉道と呼ばれていた。信州の物資はこの道により当地方に運ばれ、流域の物産は相良港より江戸、大阪へ船積みされ、また反対に、相良付近の魚・塩はこの道により北に運ばれた。街道途中の塩買坂は「塩易え坂」の意味で、米麦と海岸地方の塩や魚も交換したところから地名になったと言われる。

「塩の道」とは海岸地方から内陸に通じる道で、全国に数々あるが、県内では富士川沿いの身延街道と相良から天竜沿いの信州街道が知られている。

なお、静岡県教育委員会発行『歴史の道の調査－秋葉道』（昭和58年）は、常夜灯などの写真がおさめられ、関連事項も的確に記述されているのでぜひ参照願いたい。